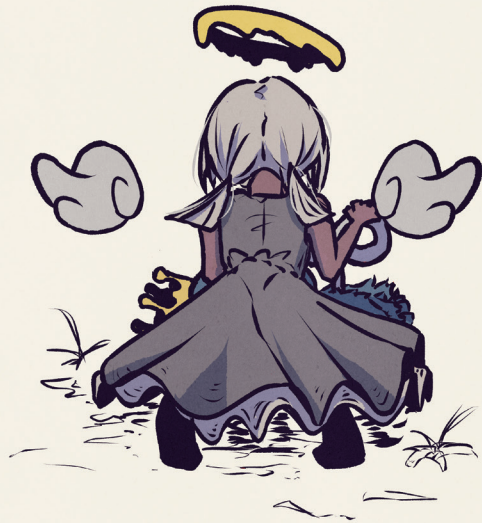


# The wind-up Neego

by kotchman



がちゃリ、がちゃリ、がちゃリ——。

こきみ おと かれ め ま  
小気味よい音がして、彼は目を覚めました。

「あ、動いた！ ねえ、私の声、聞こえる？ ねえったら！」

かれ いしき てんし む アガツ  
彼はぼんやりする意識のまま天使に向かって頷きました。

「よかった！ 本当にうれしいわ！」

わたしの名前はキュビ。

あなたの名前は？ どうしてこんなところで倒れていたの？」

かれ ときはじ き つ  
彼はその時初めて気が付きました。

自分の名前はあるか、

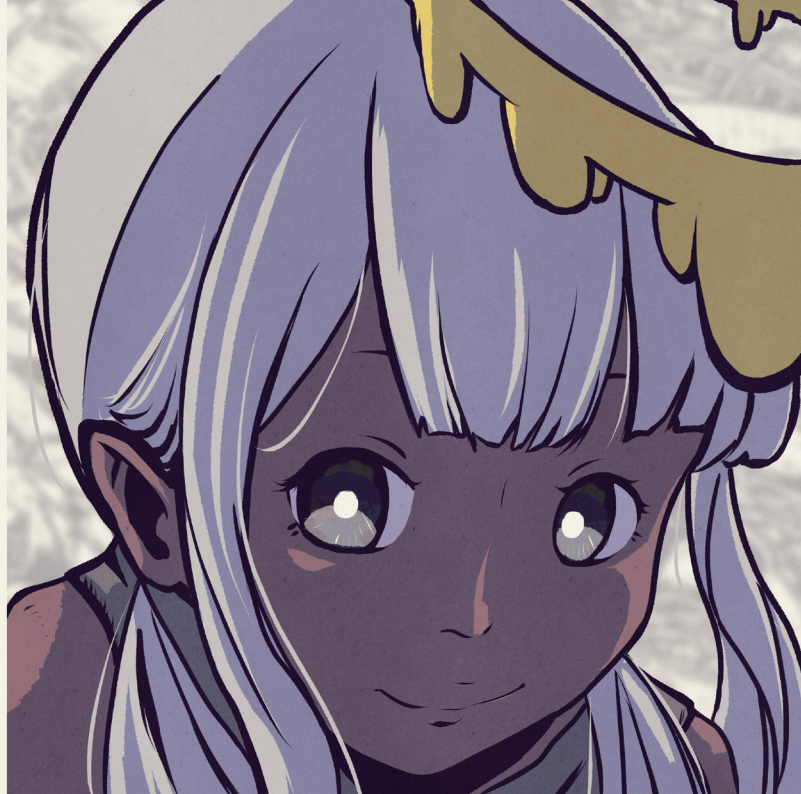
自分がこの瓦礫の中で眠っていた理由すら覚えていなかったのです。

「大変、忘れちゃったのね。」

でも心配しないで。きっと長いこと眠っていたから寝ぼけてるだけ。

時間が経てばすぐに思い出せるわ」

そうかもしれない、と彼はまた頷き返しました。



「ところであなたにはお口がついているみたいだけど  
お喋りはできるの？ もしできるならわたしの名前を言ってみて」  
「……キュビ。どうダ？ うまくできてるか？」  
「すごいすごい！ あなたって本当にすごいわ！」  
「どうやら口があったことも忘れていたみたいダ」  
「ふふ、冗談も言えるのね！  
まるで本当に……、じゃなくてまずはあなたに名前をつけなきゃね」

そう言うとキュビはひらりとワンピースの裾を翻して立ち上がりました。

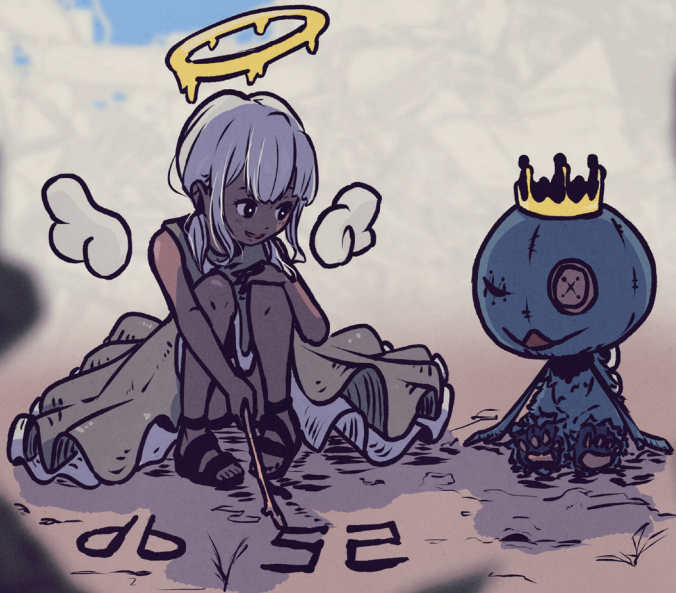
「どうして？ オイラは別に名前がなくても困らないよ」  
「わたしが困るの。」

とにかく、とっておきの名前をプレゼントするからわたしの目を見ていて。  
あら、そういえばあなたの目、片っぱいだけでも見えてるのかしら？」

キュビは彼の右目を不思議そうに覗き込みながら言いました。

「うん、よく見えてる」  
「よかった、大丈夫そうね！ それじゃあよく聞いて。  
あなたの名前はニーゴ。わたしにとっても特別なニーゴ。  
ほら、口に出して言ってみて？」  
「ニーゴ……、オイラの名前はニーゴ」

彼——ニーゴはキュビにつけてもらったその名前を  
自分の口に馴染ませるように何度も繰り返しました。



「ありがとうキュビ。この名前すてきに気に入ったよ」  
「いいのよ。わたしにとってあなたにとっても必要なことなんだから」

キュビはそう言って微笑むとニーゴに向かって手を差し出しました。

「ん？ 何ダ？」  
「友愛の証。ふふ、本当に何も覚えてないのね。  
好きな相手とはこうやって手をつないで歩くの。  
人間はみんなこうするのよ。わたしの真似、できる？」

キュビにそう聞かれたニーゴは自分の足元をみやりました。  
そこにはだらんと垂れた薄い腕と、柔らかい毛で覆われた短い足がありました。  
そしてニーゴはそれらが自分のものであることに気が付くと、  
まるでこうして見つけたのを持っていたかのように腕と足が動き出しました。

「わあッ」  
「ふふ、大丈夫そうね。ほら、手を出して」

ニーゴはキュビに言われた通り手足に念じると、  
腕はキュビの手の高さまで持ち上がり、足は地面をしっかりと掴み立ち上がりました。

「これが友愛の証」

キュビは目を糸のように細めて言いました。

「ふん」

ニーゴは初めて感じる暖かさに戸惑いながらも、  
薄い手のみりで何かを確かめるように優しく握り返しました。





ためしよみ

は

ここまでです